

# 国際会議 ICCOPT 2016 Tokyo開催の経験と教訓 (7)



## —組織委員会委員長として—

水野 眞治 (東京工業大学)

### 1. はじめに

それは、2013年5月12日、Jong-Shi Pang氏からのメールがすべてのはじまりでした。福島先生と私の両名宛てのメールで、ICCOPT 2016のCall for Site Proposalへの応募のお誘いでした。Pang氏は、ICCOPT Steering Committeeの委員長であり、次回の会議を環太平洋地域で開催する意向があり、われわれからの応募に期待するといったような内容でした。

ICCOPTは、国際学会MOS (Mathematical Optimization Society) が3年に一度主催する連続最適化に関する世界最大の国際会議です。MOS主催で開催される三つの国際会議ISMP, ICCOPT, IPCOの一つですが、1988年に東京でISMPが開催されてから、これらの国際会議は日本では開催されていません。

Pang氏からのメールを受けとってからはほどなく、福島先生からメールがありました。この年の4月に京都大学から南山大学に移られたこともあり、仮に日本で開催するにしても、組織委員会の委員長を務めることは難しいかもしれないといった内容でした。私としても、突然のことで、この時点で委員長を引き受けるつもりは、はっきり言って、あまりありませんでした。その後の福島先生とのメールのやり取りで、日本で開催するのは難しいのではないかと、といった流れにもなっていました。その一方、日本で開催しないとなるとほかのアジアの国などで開催することになりそうであり、せつかくの機会にそれも悔しい。また、東京でのISMP開催から25年が経過しており、そろそろ日本でこのような国際会議を開催するべきではないかという気持ちもありました。そこで、Steering Committeeの委員である土谷先生とも相談し、一度、連続最適化に関する東京地区の研究者に集まってもらい、開催の実現可能性について議論してはどうか、ということになりました。

早速、土谷先生、矢部先生、村松先生、伊藤先生に

声をかけ、5月20日に東工大に集まっていたきました。そこで、ICCOPT 2016の開催地の募集に名乗りを上げ、プロポーザルを提出するかについて、かなり詳細にわたり議論しました。その結果、ISMP東京からかなりの年月が過ぎておりこのような国際会議を日本で開催してもよいのではないかと、若手研究者の育成になる、あるいは最適化の研究での国際貢献になるといった意見が大勢を占め、プロポーザルを提出するべきであるとの結論に達しました。皆さんの協力が得られるということなので、この時点で委員長候補となる覚悟も決めました。この結果を福島先生にもメールでお伝えしたところ、ご賛同いただき、ご協力をいただけるとの申し出もいただきました。

### 2. 準備

具体的にプロポーザルを用意するうえで、まず決めなければいけなかったことは、組織委員会の委員、日程、会場の候補、プロポーザルと予算案の原案作成担当者でした。日程候補を2016年8月頃にする、会場候補を政策研究大学院大学 (GRIPS) にすることなどは、比較的すぐに決まりました。組織委員会の委員候補については、福島先生とも相談しながら、オールジャパンで進めるのが大事ということになりました。そこで、日本全国から幅広い意味で最適化に関する主な研究者16名に声をかけさせていただいたところ、皆さんから委員候補として加わることに同意をいただきました。プロポーザルと予算案の作成担当者は、主に東工大のメンバーで、福田先生と山下先生をメインとして、中田先生、北原先生、高野先生にもお手伝いをお願いしたところ、快くお引き受けいただくことができました。

プロポーザルの原案が作成できたところで、組織委員会の委員候補の先生方にその原案をお送りし、ご意見をいただきました。それをもとに修正するという作業を経て、7月10日にはプロポーザルと予算案を

Pang氏に提出しました。Pang氏からは、7月18日にプロポーザルなどへのコメントと質問が送られてきました。それを読んで感じたことは、短期間にプロポーザルと予算案をSteering Committeeで詳細に検討しており、かなり細かいことまで質問されてきたということでした。作成したメンバーなどの協力で、ほとんどの質問などには、すぐに回答を用意することができましたが、コメントの中で特に印象深く残っているのは、ISMP東京のバンケットの印象がPang氏にはあまりよくないようで、同じようなバンケットにしないように、という意見でした。後の話になりますが、このコメントの印象はかなり強く、バンケット会場の選定にはかなり神経を使うことになりました。

### 3. リスボンにて

ICCOPT 2016の開催地選考の結果は、リスボンで開催されるICCOPT 2013で発表されるのではないかとこのうわさがあったので、当初は予定していませんでしたが、その会議に参加することにしました。開催地に選定される場合には、前もって何らかのコンタクトがあるのではないかと予想していましたが、全く何の連絡もなかったため、リスボンでは選考に漏れたのではないかと半ばあきらめていました。ところが、開会式場で、Pang氏からICCOPT 2016の開催地を東京に決定したという発表があり、正直なところびっくりしたのを覚えています。

開催地が東京に決まったので、リスボンにおいて、とりあえずしておきたいことがありました。それは、会場に来ているMOSの要人らとICCOPT 2016について相談し、意見を聞くことでした。まず、ICCOPT 2013の組織委員会委員長Luis Vicente氏に会い、ICCOPTの開催が決まってから当日までにやらなければならないことの大まかな内容の流れ、開催までに苦労したことなどをお聞きしました。ここでお聞きしたことは、その後の実際の運営で大いに役立ちました。また、閉会式でICCOPT 2016の宣伝をさせていただくことができなかと申し入れ、ご快諾をいただきました。Pang氏との相談では、正式に決まったことは開催地が東京になったことのみで、そのほかのことはプロポーザルの内容に従い順次決めてほしいとお聞きしました。その言葉に従い、組織委員会、会場、開催日程などを決めていきました。一方、創成期からICCOPTに詳しいTamas Terlaky氏から伺ったのは、プログラム委員会の委員長候補を早急に決め、

Steering CommitteeとMOS Councilに了解を得てから、プログラム委員会の委員を決めていく必要があるということでした。そこで、気心も知れているYinyu Ye氏に会い、プログラム委員長候補となってもらうことを要請したところ、ご快諾をいただきました。その後、当時のMOS会長のPhilippe Toint氏に会い、ICCOPT 2016について相談するとともに、Ye氏をプログラム委員長とすることについてもご意見を伺ったところ、好意的な返事をいただくことができました。

### 4. 実行委員会

ICCOPT 2016の組織委員会(Organizing Committee)は、プロポーザルに記述した案のように決まりましたが、その委員は全国にわたっており、シニアの方々も含まれていたため、実際に活動するには向いていないところもありました。そこで、関東地区の委員を中心として、若手も含めた実行委員会を別に組織する必要があります。その際、組織委員会に含まれていない新委員には、LOC(Local Organizing Committee)に加わっていただくことにしました。そして、土谷先生、村松先生と一緒に3人でLOCのCo-Chairsを務めました。

実行委員会で実際に活動していくうえで、役割分担を決めることにより、効率よい運営ができるのではないかと考え、委員会の中に総務、プログラム、予算、広報、会場、Social Program、サマースクール、渉外などの小委員会を設置し、それぞれ小委員長を置くという体制をとることにしました。この役割分担は、途中、多少の委員変更と追加などはありませんでしたが、おおむね当初の分担で最後までやり抜くことができ、会議の成功に大いに貢献したのではないかと思います。

### 5. Mathematical Optimization Society

ICCOPTは、MOS(Mathematical Optimization Society)主催なので、何かを決めるときには、常にMOSから承認を得る必要があります。具体的に、MOSと連絡を取り合って決めていったものをリストアップすると、次のようになります：

- ・組織委員会の委員長ならびに委員
- ・日程ならびに会場
- ・プログラム委員会の委員長ならびに委員
- ・予算案
- ・日本OR学会の協賛の承認

- ・会場であるGRIPSの学長への手紙の執筆
- ・アブストラクト集への挨拶手紙の寄稿
- ・開会式でのあいさつ
- ・Best Paper Prizeの賞状へのサイン
- ・ICCOPT ReportとICCOPT 2016 Financial Report

ICCOPT 2016の開催が決まってから本番までに、MOS会長がPhilippe Toint氏、William Cook氏、Karen Aardal氏と移り変わったこともあり、上記のことについて彼らと連絡を取ることに、苦勞したこともあります。特に、会議開催中に会長であるAardal氏が、会議の2週間ほど前から1カ月以上の夏季休暇に入ってしまった、会議に参加されなかったことはもちろん、その間ほとんど連絡が取れなかったことには、ほとんど困りました。また、プログラム委員会の委員の構成では、Ye氏と相談しながら決めた案がなかなか認められず、何回かやり取りしながら委員の変更をして、やっと認められたということもありました。

## 6. プログラム委員会

ICCOPTのプログラム委員会の委員長は、Ye氏に決まりましたが、福島先生と私も委員になりました。この委員会の主な仕事は、

- ・サマースクールのトピックと講師の決定
- ・Plenary SpeakersとSemi-Plenary Speakersの決定
- ・Cluster Topics, Cluster Chairsの決定とオーガナイザーの依頼
- ・Best Paper Prize Committeeの委員の決定

でした。委員会では、これらの仕事の分担を定めて、おおむね順調に進めていくことができましたが、一つだけ印象に残っているのは、Plenary SpeakersとSemi-Plenary Speakersの選出方法でした。これについては、各委員がさまざま意見をもっているようであり、意見の集約が難しく感じられました。そこで、主な候補を上げ、ある程度絞ったうえで、全委員の投票で決めていくという方法を取りました。詳細については控えさせていただきますが、メールでの投票の仕方から、実際の投票、票の取りまとめまで、かなりの日数を要し、苦勞したのを鮮明に覚えています。

## 7. 日本OR学会

ICCOPT 2016の開催は、日本OR学会の協力なくしては成り立たなかったのではないかとと言えるほど、学会にはご支援をいただきました。実は、ICCOPT

とOR学会には当初から密な関係がありました。それは、ICCOPTのプロポーザルを提出することに決定したと福島先生に連絡した2013年5月の段階で、福島先生が、南山大学へのバスの中で、当時会長であった腰塚先生とたまたま一緒になり、その場で経緯を説明し、「仮にICCOPTを開催することになった場合にはOR学会にもいろいろとご協力をお願いすることになるかもしれませんのでよろしくお願いします」と話されていたということです。そのこともあり、会議の開催が正式に決まった後に、OR学会との共催もすんなりと決まりました。また、会議をOR学会の活動の一環として、会計を一緒にしていただけること、企業寄付のお願いにご協力をいただけることなどもすぐに決まりました。われわれにとって一番助かったのは、開催準備金の援助を認めていただけたことでした。このことにより、当初不安をいただいていた予算不足の問題がほぼ解消され、実行委員会一同にとって大きな安心となりました。実際に会議後の集計ではこの援助金をほとんどお返しすることができましたが、この後ろ盾があったことには、感謝してもしきれません。

## 8. おわりに

会議開催が決まってから会議終了までの3年間、実行委員の皆さんには、多大なる時間と労力を会議のために費やし、会議を成功に導いていただき、心から感謝申し上げます。この間、会議の開催のためにさまざまなことがありましたが、それを書き出すときりがなく、そのあたりのことは、すでにそれぞれの委員が本シリーズでご執筆いただいていますので、それらをご参考にしていただければと思います。開催までには、さまざまな不安、苦勞などもありましたが、大きな問題が発生することもなく、無事に会議が開催されたことを、大きな喜びと感じています。会議中あるいは終了後に、多くの参加者から、直接あるいはメールなどで、素晴らしい会議であった、特に懇親会がよかったなどと、お褒めの言葉をいただくこともできました。

最後に、ICCOPT 2016の開催にご協力をいただきました、OR学会理事の皆さま、学会事務局の皆さま、学会員の皆さま、事務支援員の皆さま、ご支援をいただいた企業の皆さまをはじめ、会議に参加されたあるいは関係されたすべての皆さまに、改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。